

人を笑わせることの考察（二）

伊藤浩睦

日本の短詩文芸は和歌に始まります。通い婚の平安時代には、女性に気に入られるような和歌を作って交際を求めるのが社会のルールであり、女性の側も返歌を作っていましたから、嗜む人の数は男女同数であったと考えられます。

鎌倉期になって家同士の嫁取り婚になると、恋愛の為に歌を女性に贈る必要はなくなり、和歌は実用性がなくなってきます。その代わりに連歌が流行り始めます。

連歌は一つの場に何人かが集まって行ないますが、他人の男女が膝を突き合わせてといったことは嫌われましたから、連歌の座への参加者は男性ばかりになりました。

一座に集って句を付け合って行って、言葉の上で四季を巡らせ、歌枕の地を旅して、恋や花や月を詠む作業は、とても楽しいものであり、とくに武士階級に大きな支持を得ることになります。

室町時代には地下連歌といい、身分の低い地下人の間にも流行しますが、句の勝ち負けを争い、その勝敗に金品を賭けるようになります。句の優劣を判定する人を判者と言いました。後の江戸点取り俳諧は賞品が賭けられていて、句の優劣を判定する人を点者と言いましたが、連歌と俳諧の違いこそあれ庶民は同じことをやっていたのです。

応仁の乱のときには、足輕が略奪してきた品を賭けて地下連歌に興じたという記録が残っています。

地下連歌は賭けごとなので飽きが来るようなことはありませんが、賭けごとでない、文芸の世界を楽しむ、上級武士や公家や僧侶が嗜んでいた連歌は、長年やっていると詠み方がパターン化してきて飽きがきます。

連歌の会が終わったあと、読み手を笑わせるような句を作ることが流行り出します。これは人の営みとして画期的なものであったと思われます。

恋の歌を詠んで、自分の恋愛を成就させたいという思いや、複数人で句を付

け合う面白さを楽しむことはあっても、他人を笑わせてやろうという試みが短詩文芸のなかで行なわれることはなかったのです。

古代に俳優（わざおき）と呼ばれる人がいたと伝わっていますが、詳しいことは分かりません。能が興行として行われるようになると、猿楽の笑いの部分を洗練した演劇として狂言が現れます。

狂言を見ていた人たちが、自分たちも狂言師のように他人を笑わせてみたいと考えるようになるのは当然の流れだといえます。

狂言師は商売ですが、連歌の会のあとで読み手を笑わせるような句を作るのは商売ではありません。同席している人に対する無償の奉仕でしたが、句が嵌って、同席者が大爆笑してくれたときの快感には、素晴らしいものがあったはずで

そこには、お笑いなどはバカがバカを言っているだけだからいちばん詰まらない、などといった見方とは別世界の感性が存在しています。この時点で、日本人は初めて、素人が他人を笑わせることの素晴らしさを知ったといえます。